

## 84 園丁と蝶の対話 「徳について」

莊周　こんばんは、最近、なかなか君と会えませんね。

園丁　ええ、六月も半ばを過ぎるのにまだあまり気温が上がらず、よく眠れるせいかな夢を見るのが少ないですからね。今日はあなたから声をかけてきて、話でもあるのですか？

莊周　そう、君と問答するのは楽しいですからね。たまには相手をしてください。このあいだ君は『徳は知なり』という書物を読んだじゃないですか。その話をしてほしいですね。

園丁　どうしてそれを知っているのですか？

莊周　よく分からないけど、君の言うところに従えば、うつつのことも夢も、脳の神経回路網を信号が行き来して知られるわけでしょう。君がその通信を思い出せなくても、その回路網に生息する蝶が知っていてもおかしくありません。

それで、その書物はどのようなものでしたか？

園丁　はい、著者のジュリア・アナスという人は、英国生まれで73歳、合州国の大学でまだ現役の教授だそうです。とくに隠退している園丁の僕には縁がありませんが、古代哲学を専門とする女流哲学者だということですから、古代の哲学者である莊周さんは知っているかもしれません。

莊周　その人が研究しているというプラトンさんアリストテレスさんの名は聞いていますが……。いつものように、どういことが書いてあったか話してください。

園丁 この書物の表題は『Intelligent Virtue』です。それを日本語で「徳は知なり」と表わし、「幸福に生きるための倫理学」という副題が添えてあります。徳を「知なり」と言い切ると知が強調されすぎのきらいがありますが、「徳には実践的知性が欠かせないし徳は幸福に結びつく」という著者の考えを表現しています。

冒頭に、「本書の目的は徳について説明することである」とあります。「徳を説明する」という言葉が僕には奇妙に聞こえましたが、どうも、現代の倫理学理論のあいだに論争があるようなのです。訳者は、義務論・帰結主義・徳倫理学という三つの主要な立場があると解説しています。著者は三つ目の古代ギリシアの倫理学の流れをくむ徳倫理学の立場に立つようです。ところが、徳倫理学にも多様な考え方があり、前の二つの立場はさらに考え方が違うようです。それで、著者は、ほかの倫理学理論と区別して自分の考える徳を説明しようとするのです。

莊周 論争を念頭に徳を説明するとなれば、論争の相手をやりこめて徳の特徴を主張することになりませんか？

園丁 ええ。この書物では、「徳とは何か」を明らかにするのに、異なる意見との差をいちいち論じて自分の主張する「徳」の姿を切り出していくやり方が採用されます。

莊周 意識的にそういう方法が採用されるのですか。昔の有徳

な人が徳を勧めた書物とは流儀が違うようですね。そういうやり方で徳を論じて、徳に至ることができるでしょうか？

園丁 たしかにあなたのやり方と違います。荘周さんの文章は簡潔ですがあるリズムをもちイメージを伴いますから、思索を膨らませてくれます。それと反対に、この書物ではこまごまと論じる文章が続きますから、その理屈に注意しながら読み進まなければなりません。ですから、お察しのように僕は苦勞したのです。あなたにそういう疑念が生まれるとすれば、この話はおもしろくないかもしれません。

荘周 話し始めたからには、弱音を吐かずがんばって。

園丁 第1章の序論に簡単なまとめがありますが、それを話すとすぐに終わってしまいそうなので、第2章から始めて、著者がどのように徳を説明していくか見ていきましょう。アナスさんは、日常生活の場で人が徳をどのようなものとみているかから説き起こします。このアプローチは好ましいものだとも思います。普段の会話で出てくる「ジェーンは気前がよい」という言葉が徳の一例として挙げられます。それが何を意味するかを考えていくと、徳とは、「一貫して存続し、当てにすることができ、性格を表わすような特性」だとします。そうしてまもなく、「徳は、一定の仕方の行為と推論と感情のうちに現われる傾向性である」という定義のようなものが出てきます。第3章から第7章までは、この最初の“定義”に肉づけをして著者の考える徳の意味を豊

かにするためにある、とすることができます。

徳の特性を身近なことから明らかにするというアプローチを維持して、第3章で照らし出されるのは、徳が実践的的技能に似ているという点です。これは著者の自負している論点と見えます。ところで、技能や技術はアリストテレスが議論し、それと徳との類似性にも言及しているからです、古代哲学を専門とするアナスさんの得意分野なのです。

技能との類似性から知られる徳の特性として、まず、「学習の必要性」と「駆り立てる向上心」とが挙げられます。前者について、徳が「知的な構造」をもち、「実際にそれをすることによって学習される」こと、「有徳な人は、理由にもとづいて行為する傾向性をもつ」こと、その反応が「知にもとづいた反応」だということ、だから「有徳な人は思慮深い人」であることなどが、けっこう長い行論のなかで指摘されます。「駆り立てる向上心」については、「徳それ自体が本質的に発達という考えを含む概念」であることなどが指摘されます。最後に、この章では徳にとって重要な「正しい行為」についても議論されています。

莊周 その要約だと、徳についてすでに言われていること以上のことは議論されていないように聞こえますよ。

園丁 莊周さんには、たいていのことでこれまで言われなかったことはないでしょう。でも、それを言ったら話が終わってしまいますから、先へ進みます。

第5章の表題は「徳とよろこび」です。快いところもあるでしょう。最初の段落で「有徳な人が感情も関心ももたずに有徳な行為をすることはない」と言って、感情の側面に向かい、アリストテレスを引いて「有徳な人は自分のすることを快く思う」と考えます。さらに、「有徳な活動はそれ自体で価値がある」と宣言されます。

第6章は「徳の多数性と統一性」を議論します。著者は「気前がよい」や「勇敢である」などの徳目を例に挙げて議論してきましたが、「もろもろの徳を互いに切り離して一つずつ数えることはできない」と一歩を進め、「徳がまとまりをなす」という重要な特性を言明します。また、人間を見ていると生まれつき備わっている自然的な特性が目につきますが、重要なのは実践的知性を必要とするような徳なのです。実践的知性という言葉は前にも出ましたが、それを際立たせるために、アリストテレスの「卓越した実践的知性」という言葉を引きます。それは「性格をまるごと覆うようにして全体的に発達する」ものなのです。「実践的知性それ自体が生活の全体にわたって統一されている」という言い方で、徳の統一性が述べられます。ここで、徳を一般的にとらえるのではなく個々の人間に当てはまるように、「徳はそれぞれの生活にふさわしいかたちで統一される必要がある」ことが指摘されます。

莊周 ふーん。君はアナスさんを十分擁護できていませんよ。

園丁 まあ、そう言わずに聞いてください。第7章で「徳と善」

が語られますから。それは、大上段にではなく、「徳は善に肩入れする」と表現されます。この控えめな言い方は荘周さん好みではないですか。この章では、「善とさまざまな特性」や「善に対する肩入れの種類」が議論されています。

荘周 それを具体的に説明しないのですか？

園丁 とにかく、議論がほかの倫理学の考え方を批判しながらいちいち細かいので、僕には煩わしかったのです。そういう部分を省略して、僕が受けとめるべきだと考えた要点だけを話しているので、あなたにそう聞えるのでしょうか。

園丁 もう少しがまんして聞いてください。第 8 章と第 9 章で論点は幸福論に移ります。アナスさんは、近代になって徳が幸福に寄与するという考えが見捨てられたと見ています。しかし、徳倫理学が復興してきたので、幸福についても再認識が必要だとします。アナスさんの幸福論は、結局のところ、古代のエウダイモニア主義に落ち着きます。古代のエウダイモニアという言葉はおおよそ幸福を意味していたそうです。幸福論に関しても、僕が線を引いたのは僕にとって大事だという点ですから、内容の要約にはなっていませんので、あしからず。

荘周 ああ、そうですか。

園丁 人生についての内省によって、人の大きな目標が「私の人生全体を形づくる」ことにあることに気づく、というような議論がまずあります。そして、幸福という概念を、「幸福

は、私たちの誰もが人生の一般的目標として臨むものであり、人生の全体的目標をもつことという不明確な考えを明確にするものである」と言い取ります。これによって、幸福が「倫理学理論のなかできわめて有用な役割を果たす」ことができることとなります。幸福という観念は徳を導くのです。さらに、「幸福は、それぞれの人にとって、あなたの幸福として、よく生きることをあなたがどのように達成するかの問題として位置づけられる」と言えば、幸福はほとんど徳のうちに含まれることとなります。そこに、アリストテレスやストア派の哲学者が「どのように生きるかという意味での幸福について論じている」という言葉がつけ加えられます。やはり、幸福は徳と切り離せないのです。

しかし、幸福を快樂や欲求と区別する必要がありますから、それについての議論があります。現代的な生活満足度という言葉も点検されます。そういう検討を経て、エウダイモニア主義が改めて称揚されます。

　　莊周さん、聞いていますか？

莊周　ええ、がまんして聞いていますよ。

園丁　第9章で、「有徳に生きることと幸福に生きること」が総論的に議論されます。この章でも僕が線を引いたところはわずかですが、その文章を書きとめてみましょう。

　「私の目の前にあるその人生は、与えられた環境のなかで、私がそれまでどのように生きてきたかによって大部分が形

作られている。私がどのように生きるかは、私の性格による  
ところが大きい。つまり、生活のさまざまな場面で自分の価値観に従いながら、私がどのように行為し、推論し、感じる傾向があるのかによって、私の生き方の大部分が決まる。とはいえ、人生は常に進行中であり、内省の結果として、また環境のなかの変化要因に対する反応の結果として、私たちは常にさまざまなかたちで発達していく以上、……私は常に自分のあり方を調整しているのである」。もう一つ、これに続くべき文章がありました。「徳は性格がどのようなものであるかの問題である。つまり、生活のさまざまな領域で、さまざまな徳（と悪徳）が私の性格を作り上げるのである。エウダイモニア主義者の見解によれば、幸福とは、私が人生全体をどのように生きるかにほかならない。それゆえ、どの人生にも、徳（および悪徳）と幸福のあいだのダイナミックな相互作用が常にある」。

この二つは、徳と幸福について、それまでの章で切り出してきた個々の要素をまとめて記している文章だ、と思います。見落とした文章があったかもしれませんが、どうも、著者は、徳と幸福を、自己の精神から湧き出る言葉で表現し尽くすことに熱心ではない、と感じました。

莊周 ふーむ …。わたしの時代にそんなことはしなかったけれども、君は、書物を読むとき鉛筆で線を引くという悪習をもっています。（独白、現代人は頭がよくないのかもしれない）。さて、君が線を引くのは、感心したところや、習得しなけれ

ばいけないところや、参考になる考えなどで、弱い記憶力を補うためにあとで見直すかもしれないからですね。

園丁 まあ、そういうことです。

莊周 すると、ここまで君が話してきたところから見ると、銘記すべき文章はそれほど多くなかったことになります。しかも、線を引いたという文章に、これまで天の下で語られていなかった内容を含むものはやはりなかった、とわたしには思えます。君の話し方自身に君の不満が現われていました。

園丁 ですから、僕はこの話題に気乗りがしなかったのです。そうほのめかしたつもりですが。

莊周 徳を語るのに、ほかの論者との違いをいちいち示すというのはあまり有徳な行ないではないですね。むしろ、自分が習得して知った徳の優れたところを称揚することが徳を説く王道だ、とわたしは思います。たとえそれがすでに語られたことであっても、人間はそれを復唱することによってのみ向上することができるのだ、とわたしは思います。

園丁 はい、受けたまわりました。僕はそういう文章を求めてこの書物を読んだのでした。だけど、今のは、莊周さんにしてはめずらしいすなおな言い方でしたね。

莊周 人をからかわないでください。わたしたちは徳に近づこうとして問答しているのでしょうか？

\*

莊周 さて、君はアナスさんの徳論に耳を傾けてそれなりに受け入れようとしたのだけれど、物足りなくて不満をもらしていると見えます。物足りなさを感じたときには、それを補う考えが浮かんだのではないですか？

園丁 えっ。まだ、僕に話を続けさせようというのですか？

莊周 君の神経回路に巣くう蝶は、そこを巡った言葉の断片に気づきましたよ。君のフラストレーションを解消するには、それらの言葉を整理してみるのが一番の療法ですよ。

園丁 どこでそんなカタカナ言葉を憶えたのですか。まるで現代の心理療法士のようなやり方で僕をそそのかして。

莊周 でも、やってみませんか。今日の間答をしめくくるためにも。一寝入りして待ちますから。

莊周 …ああ、本当に寝入ってしまったようだ。

さて、やる気になりましたか？

園丁 かないませんね、あなたには。そんな手を使って。

しかし、仕方がないからやってみます。でも、僕には自前で徳を論じることなどできませんから、アナスさんが説いたことを修正するやり方をしてみます。「蝶の雑記帳 82」で考えたことは有徳をめざすことでしょうかから、それを足がかりにしてみます。あそこでは、多くを僕が強く影響を受けているカントの考え方に依拠しました。アナスさんは、基本的に古代哲学に基づいて現代の生活にふさわしい徳のあり方を議論しましたが、現代にふさわしく徳を言い表わすとすれ

ば、近・現代哲学への転回をもたらしたカントの『三批判書』を踏まえることが必要だ、と思います。

園丁 まず、「徳は、一定の仕方の行為と推論と感情のうちに現われる傾向性である」という中心的な命題を吟味してみましょう。この表現は、日常使う言葉に近いという点で取り柄があります。でも、この命題が含む内容を豊かにするために、もっと表現を変えてみましょう。ここの「推論」は「実践的知性」と結びつけられますが、人間精神の働きを分節したカントの用語を使って「理性」とした方が意味を精確にできるでしょう。すると、徳において、「推論」と「行為」は、「実践理性」の問題になります。

けれども、第9章のまとめに当たる文章には、「…人生は、与えられた環境のなかで、それまでどのように生きてきたかによって大部分が形作られている。……人生は常に進行中であり、内省の結果として、また環境のなかの変化要因に対する反応の結果として、私たちは常にさまざまなかたちで発達していく以上、… 私は常に自分のあり方を調整している…」という文章があつて、実践理性以前にある人生のあり方も関係していることが認識されています。それは、純粋理性がかかわる認識の問題でもあるのです。「実践的知性それ自体が生活の全体にわたって統一されている」という言い方にも表われています。認識は、徳に類似しているとされる熟練した技能においてすでにあるでしょう。さらに言えば、「環境の

なかの変化要因に対する反応」や「自分のあり方の調整」には「判断」が働いています。さらに、アナスさんの言う徳にかかわる「感情」は、カントの『判断力批判』が擲き出した「判断力」でもあります。

莊周 おやおや、問答をためらっていたのに、ずいぶん大ぶろしきを広げましたね。それがカント学徒のすることですか。

園丁 しかし、徳に「知的な構造」があるというような言い方をすれば、徳は認識すべき対象ということになりませんか。「学習の必要性」や「有徳な人は思慮深い人」という言葉も、有徳であるために何らかの対象を認識しなければならない、と言っているように思います。

莊周 それで、アナスさんの徳理論を現代にふさわしく表現するという話はどうなりますか？

園丁 はい。では、“大ぶろしき”を広げてお膳立てをしてみましょう。

世界は無機的な自然と有機的な生命圏から成り立ちます。その世界は事物の法則に従って存在します。人間がその事物の世界をどのように認識するのか、『純粹理性批判』が基礎を据えました。しかし、人間にとって世界はそれだけで閉じません。人間は人間の社会のなかで生きています。その生活は事物を対象にして営まれますが、人間と社会の動きは認識が不可能なほど複雑です。ずいぶん粗い言い方ですが、人間は純粹理性による認識と判断だけでは生きていくことができま

せん。だから、人間には実践理性というものが必要なのです。

アナスさんは倫理学の問題として徳を考えますが、カントは道徳のなかに倫理を含めてとらえます。そして、カントの『三批判書』は学的体系の基礎を提起するものです。できるかぎり世界をよく認識することを勧めて、超越的な理念を掲げることをしません。だから、実践理性として言明されるのは提言命題の形式の普遍的な道徳法則だけです。カントの議論でも人間の「性格」が重要な要素です。だからそこには、アナスさんの言う「性格がどのようなものであるかの問題」＝「徳」が考察されているのです。しかし、「人生全体をどのように生きるか」の実践理性上の具体的な説明はそこにはありません。アナスさんはそれに満足できません。

荘周 そうでしょうね。君はどうするのですか？

園丁 ですがカントは、超越的な理念を掲げることを控えたのに、永遠なものという理想や宗教的理想を棄てきれずに、道徳を説いたのです。それをニーチェは後戻りだと見ました。しかし、超越を戒めるカントの『三批判書』の行論に耳をすませば、「徳」が満ちているということが分かります。カントは、自分の学説を発展させ、それを体得して生活を律し、有徳の理想に向かって歩んだ人です。足りなかったのは、シラー夫人の表現では「愛」だけだったということです。でも、カントには普通の人々の愛よりも多くがあった、と僕は思います。カントに私淑する僕には、『三批判書』は徳を説く書物でもあるのです。

莊周 ああ、君は高揚して話していますね。たしかに、カントさんの徳にかかわる文章は人に徳を勧めますね。

園丁 ええ、カントはアナスの学んだプラトンを越える哲学的基礎を建設しましたが、プラトンを尊敬したということです。その幸福論も尊重したのではないのでしょうか。自分を「道徳的」に厳しく律したカントはまた幸福を大切にした、と僕は思います。カントに接した人たちがみなそれを証言しています。

莊周 わかりましたが、アナスさんの追いかけている徳理論についてまだ言うべきことはありませんか？

園丁 その前に言うべきことが一つ思い浮かびました。現代が地質学的年代を画して「人新世」と呼ぶべき世に至っていることです。それは人間がしたことですが、人間はその視野を世界全体に広げなければならない事態に直面しています。すると、“大ぶろしき”を広げて始めたことに意味があることが分かります。今や、人間がどのように生活すべきかという問いは、生命圏での生命倫理、さらに生命に必須の地球環境における責任、…というふうに、世界全体に向かうべきものになっているのです。

莊周 大きな話になりましたね。

園丁 そういう問いも突きつけられていることを知っているだけで、僕はどうすればよいか知りませんが。

莊周 昔の人間が考えなくてすんだ問題がありますね。現代人

はたいへんだ。

園丁 ……

莊周 問答が窮してもいけません。先ほどの、つまり、徳を養うにはどうすればよいかという話に戻りませんか。

園丁 はい。すでに触れましたが、カントの『判断力批判』には、よく判断することについて学ぶことがあると思います。幸福はそれに関係し、アナスさんの言う「感情」の一部もそれに関係すると思います。それに比べて、実践理性をどう働かせればよいかという問いはむずかしい問題です。『三批判書』は基礎体系ですから、それを具体的には語りません。カントは、「徳」自体を取り上げて語るよりも、現実の世界で重要だと考えた具体的なテーマを考えました。この態度を学ぶべきなのでしょう。

でも、平凡な人間は、日常の生活を反省してよい行動を行なうことができるように努めなければなりません。なんとか「徳」を体得し「幸福」を形成することに努めなければならぬのです。アナスさんのさまざまな言葉のなかにそのヒントがあるのでしょう。「性格をまるごと覆うようにして全体的に発達する」、「正しい行為」、「徳は善に肩入れする」、「徳とよろこび」、「有徳な人が感情も関心ももたずに有徳な行為をすることはない」、「有徳な人は自分のすることを快く思う」…という言葉で、自分を点検することが必要です。また、「幸福は、私たちの誰もが人生の一般的目標」、「幸

福は、それぞれの人にとって、あなたの幸福として、よく生きることをあなたがどのように達成するかの問題として位置づけられる」という言葉を、幸福を求める励ましと受けとりましょう。

莊周 おやおや、読むのに倦んだ口ぶりを翻して、最後になってアナスさんの行論を評価しましたね。

園丁 ええ。読んだ本を突き放すよりも、そこから学ぶ方が有徳な行ないでしょうから。

莊周 君も有徳をめざしますか。

園丁 僕は、常日頃、短気で気が小さくて人づきあいが悪くて…と、数えきれない不徳を気にしていますからね。

そうすると、「徳それ自体が本質的に発達という考えを含む概念」という指摘も捨ててはいけません。徳を「駆り立てる向上心」ととらえる見方が大事になります。前々回、僕は、「千聖不伝」の「向上一路」をめざして生きなければならぬということを学んだのでした。

莊周 ああ、話をそこにつなぎましたか。

しかし、そのように考えてきた君は徳の修得で本当に前進したのですか。徳に資する力を得ましたか？

そもさん！

園丁 えっ。